

共同研究

日本におけるチベット仏教文化の研究

—多田等観の将来資料を中心に—

主 任 能 仁 正 顕

研究員 宮 治 昭
岡 本 健 資
岩 田 朋 子
天 野 信
李 曼 寧

序 言

本研究は、2016・17年度の2年の期間にわたり「仏教文化研究所」の共同研究プロジェクトとして採択されたもので、チベット仏教僧として、1913年から23年までラサ郊外にあるセラ僧院（1419年創建）に学んだ多田等観が将来した資料、特に「釈尊絵伝」について総合的に研究することを目的としたものである。当時、鎖国状態にあったチベットに日本から多田とともに青木文教が派遣されたが、そもそもこの研究調査は、大谷光瑞西本願寺第22代宗主とグライラマ13世との合意のもと交換留学の形で実現した特筆すべきもので、日本におけるチベット学の礎を築くことになる重要な出来事であった。本研究プロジェクトでは以下の4項目を柱として研究を進めてきた。若干のコメントを付しながら研究活動を総括しておく。

1) 東洋文庫にて未整理となっている多田等観関連資料の現地調査

晩年、多田は東洋文庫を研究活動の拠点とし、1956年には研究員として在職した。そのため東洋文庫には多くの多田等観関連資料が残されている。東洋文庫の協力を得て、岩田研究員は2016年5月より精力的に調査活動を行い、都合6度調査に入った。調査内容については、「多田等観へ下賜された「釈尊絵伝」と未整理の関連資料に関する調査途中報告」（『龍谷大学仏教文化研究所所報』第41号掲載、2018年3月刊）においてその概要を報告したので参照されたい。調査の結果、決してその資料価値は低くないことが判明し、今後も継続して調査を進める予定である。

2) 「釈尊絵伝ガラス乾板」(24枚、1941年撮影／花巻市博物館では未整理)の調査研究

多田は自身が編集した『西藏仏画釈尊伝』を1958年に上梓した。その中で仏伝の場面解説を担当したのが芳村修基(龍谷大学教授)であった。能仁は芳村氏の「釈尊絵伝」研究に係る資料を収集したが、その中にはガラス乾板から現像した写真が含まれていた。おそらく写真画像を傍らに置いて仏伝の場面を確認していたのであろう。ほかに絵伝の各場面に書き込まれた詞書きを筆写したノートもあり、その解読に取り組んでいた様子が窺える資料であることを確認した。

3) 「釈尊絵伝」の典拠とされる『ターラナータ仏伝』・『作画録』と「根本説一切有部律」との対応箇所を中心にした翻訳研究

4) 上記3の翻訳研究を進めながら、ガンダーラ・中央アジアの仏伝彫刻と「釈尊絵伝」との比較

上記の3)、4)については、能仁は中国蔵学研究センターと、宮治研究員は中国人民大学芸術学院との交流を通して研究や若手人材育成の活動を展開した。またターラナータが創建に関わったタクテン・プンツォクリン寺(現チベット自治区)に、「釈尊絵伝」と同趣旨の壁画が存在するという情報を岡本研究員は入手した。それをもとに岡本研究員は、2017年12月に龍谷大学世界仏教文化研究センター主催の国際シンポジウム「チベットの宗教文化と梵文写本研究」において「多田等観請来「釈迦牟尼世尊絵伝」に描かれる「ムクターラターの物語」と題した発表を行い、'Paintings of Princess Muktālātā's Conversion Story: A Comparative Study of the Shakuson Eden and the Rtag brtan Phun tshogs gling Monastery's Mural' としてまとめ *Journal of World Buddhist Cultures Vol. 1* (『世界仏教文化研究』第1号、2018年3月)に投稿した。その英文論考を日本語に改め加筆修正したのが本稿である。それをもって2年間の本研究プロジェクトの成果報告論文としたい。また今後は、現地調査を視野に入れて研究を継続していく予定である。

(能仁正顕 記)

王女ムクターラーの帰依物語

多田等観請来「釈尊絵伝」とタクテン・プンツォクリン寺壁画の比較

※本稿は、2018年3月に出版された拙稿“Paintings of Princess Muktālātā’s Conversion Story: A Comparative Study of the Shakuson Eden and the Rtag brtan Phun tshogs gling Monastery’s Mural,” *Journal of World Buddhist Cultures* (=『世界仏教文化研究』), vol. 1, pp. 33-58を和訳し加筆修正したものである。

秋田県出身の西本願寺（浄土真宗本願寺派）僧であった多田等観（1890-1967）は、西本願寺第22世宗主である大谷光瑞の命により、本来の仏教の姿を探究しようとする「大谷探検隊」の活動の一環として、チベットの仏教文化を学ぶため、現地僧院へ派遣された。1913年から1923年までの約十年間、チベットのセラ僧院において僧として仏教研究に専心した多田は、チベット僧の最高学位「ゲシェ（dge bshes）」を授与された。彼は帰国後も、東北帝国大学（現在の東北大学）などで教壇に立ちながらチベット仏教に対する研究活動を続け、『西藏撰述仏典目録』などの作成に従事し、その後の日本のチベット研究に大きな影響を与えた。その功績は公にも認められ、日本学士院賞を受賞している。1937年5月、東北帝国大学法文学部で教鞭をとっていた彼のもとに、ダライラマ13世（1876-1933）の遺命に従い贈られたのが、ダライラマ13世愛蔵の、釈尊の生涯が描かれた大部の仏画（「釈尊絵伝」）である。それは、多田が帰国時にダライラマ13世に所望したが、その際には請来が叶わなかったものであった。

現在、岩手県の花巻市博物館に収蔵されるこの「釈尊絵伝」は、全25幅の巻物から成り、約120場面にのぼる釈迦牟尼の今生の生涯における出来事を描く（釈迦牟尼の涅槃後の出来事も若



〈fig. 1〉「釈尊絵伝」右1図の一部
兜率天の様子



〈fig. 2〉「釈尊絵伝」右1図の一部
託胎霊夢



〈fig. 3〉「釈尊絵伝」右1図の一部
右脇からの誕生

干含まれる)。絵が描き込まれている部分のサイズは、縦横約78 cm × 約54 cm である。また、仏画の並びは、本尊を描いた1幅を中心として、左右にそれぞれ12幅ずつ展開したようである(但し、左図の12幅の内の1幅は欠落している)。また、上述の「本尊」1幅とは別に、右図や左図に属さない「本尊タンカ・エクストラ」と呼ばれる1幅が存在する。すなわち、本尊1幅、そして右図12幅と左図11幅(?)、これに本尊タンカ・エクストラ1幅を加えると合計25幅となる。なお、画布の余白部分には「右第6」(*gyas drug pa*)「左第8」(*gyon brgyad pa*)¹⁾などと書き込まれる場合があり、各幅の並びが判明する。「釈尊絵伝」における釈迦牟尼の生涯を描いた部分は、右1図(便宜上、右図の1幅目をこの様に呼ぶこととする。以下、他図についても同様。)から始まる。そこには、釈迦牟尼が菩薩時に兜率天で過ごしたエピソードや、生母マーヤーが白象が入胎する夢を見る「託胎霊夢」、そしてマーヤーの右脇からの誕生の様子などが描かれている(figs. 1-3)。一連の右図の最後に位置するのは右12図である。右12図中の最後のエピソードは、異教徒の指導者たち(六師外道)から神通力比べを挑まれた釈迦牟尼が、偉大な神変を示現して彼らを退却させる「舎衛城の神変」である。これに続く左1図冒頭には、「舎衛城の神変」とともに言及されることのあるエピソード、すなわち、忉利天に昇った釈迦牟尼が神々に説法を行い地上に降りる「從忉利天降下」(または「三道宝階降下」)が描かれている。この話も含め、左図には多くの教化の話が描かれており、左11図や12図には、釈迦牟尼の涅槃の様子と舍利八分、第一結集やその後の法の継承について描かれる。このように、「釈尊絵伝」には、釈迦牟尼の生涯がほぼ時系列に沿って描かれている。多田等観が請来したこの「釈尊絵伝」に対して、最も詳細な研究を発表したのは奥山直司であろう。

1991年、奥山は、自らの論文「多田等観請来仏伝図タンカについて」の中で、この「釈尊絵伝」がチベット仏教のチョナン (*Jo nang*) 派の僧ターラナータ (*Tāranātha* または *Kun dga' snying po*: 1575-1638) が著した二つの文献に直接依拠した作品であることを、初めて指摘した。その二つの文献とは、まず、様々な律文献や説話集などを基礎に編纂された仏伝『世尊牟尼王の御行の略説、〈見ることで利益があり歓喜を伴うことから信の太陽が百方に昇る〉と名づくるもの (*Bcom ldan 'das thub pa'i dbang po'i mdzad pa mdo tsam brjod pa mthong bas don ldan rab tu dga' ba dang bcas pas dad pa'i nyin byed phyogs brgyar 'char ba zhes bya ba*)』(以下、『御行の略説』またはSDと略す)、そして次に、仏伝図の描き方についての指南書『尊師釈迦王の百行の作画録 (*Ston pa Śākya'i dbang po'i mdzad pa brgya pa'i bris yig*)』(以下、『作画録』またはRPと略す)である。

1996年、奥山は「釈尊絵伝」についてのより詳細な研究を公表した²⁾。この研究の中で、奥山は「釈尊絵伝」のチベットにおける所蔵地について、「多田の目に容易に触れる所…。ポタラ宮、もしくは13世が日常生活を送っていたノル布林カ離宮の一角であったことは間違いのないだろう」と述べている。また、花巻市博物館に寄贈される前まで多田の請来品を保管していた「蔵脩館」が出版した図録『多田等観請来西藏仏像、仏画図録』の中で、この「釈尊絵伝」が「ダライ

ラマ第十三世秘蔵のポタラ宮殿の壁画の原画である³⁾」と言及されていることに注目した奥山は、「今のところそれに当たる仏伝図壁画がポタラ宮にあることは確認されていない。…本絵伝は、ターラナータの著作に依拠することが確認された唯一の作例と考えられる⁴⁾」とした。

2015年、Andrew Quintman と Kurtis R. Schaeffer は、“The Life of the Buddha at Rtag brtan Phun tshogs gling Monastery in Text, Image, and Institution: A Preliminary Overview” (*Journal of Tibetology* 13, pp: 32-73. 以下、この論文を Quintman-Schaeffer 論文と略す) と題する論文を発表し、ターラナータが1615年に建設に着手し自らその僧院長をつとめた、現チベット自治区ツァン (Gtsang) 地方の僧院「彭措林寺」(タクテン・プンツォクリン: Rtag brtan Phun tshogs gling) に、ターラナータが著した二つの文献に依拠する壁画が存在することを明らかにした。その文献の一つは、*Bcom ldan 'das dpal rgyal ba shākya thub pa shākya sengge'i rgyal po gang de'i mdzad pa mdo tsam brjod pa mthong bas don ldan rab tu dga' ba dang bcas pas dad pa'i nyin byed phyogs brgyar 'char ba* (Quintman-Schaeffer 論文での英訳は “The Sun of Faith That Shines in One Hundred Directions: A Brief Account of the Acts of the Blessed Lord and Glorious Victor Śākyamuni, Lion of the Śākyas, King of the Śākyas, that is Delightful and Meaningful to Behold”) であり、そのため、Quintman-Schaeffer 論文は、この文献を *Sun of Faith* と略称する。壁画の底本となったもう一つの文献は、*Ston pa shākya'i dbang po'i mdzad pa brgyad pa'i bris yig rje btsun kun snying gis mdzad pa* (Quintman-Schaeffer 論文での英訳は “A Painting Manual to the Hundred Acts of the Teacher Śākyamuni Written by Rje btsun Kun [dga] Snying [po]”) である。そのため、Quintman-Schaeffer 論文は、*Painting Manual* と略称する。Quintman-Schaeffer 論文の中で、*Sun of Faith* には複数の異本があったことが指摘され、奥山が「釈尊絵伝」の底本として指摘した『御行の略説』(SD) もその一つに挙げられている⁵⁾。また、*Painting Manual* の原題も『作画録』(RP) とほぼ一致し、内容的にも



壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 47])
王女ムクタラターの皈依

同じようである。従って、タクテン・プンツォクリン寺における壁画と多田等観請来「釈尊絵伝」は、同じ文献を底本とする姉妹関係にあるものと考えられる。しかし、Quintman-Schaeffer 論文では、「釈尊絵伝」に言及されない。

そこで本稿では、Quintman-Schaeffer 論文の中に、タクテン・プンツォクリン寺壁画に含まれる「王女ムクターラターの物語」の全てが写真として含まれるため、この物語に着目し「釈尊絵伝」のものと比較する。この物語は、島国シンハラ王女ムクターラターが、仏教に帰依した経緯を描いたものである。ある時、ムクターラターは、商人たちが経典を読誦しているのを聞き、心を動かされる。彼らに何の経典なのかを尋ねた王女は、ブッダについて知る。そこで王女は、その商人たちに、ブッダへの手紙を託す。その後、王女が仏教に関心を持っていることを知ったブッダは、王女のために自分の肖像画を描かせ、それを商人たちに渡す。シンハラ国に戻った商人たちは、それを彼女に渡す。王女は布施としての真珠を商人たちに渡し、ブッダのもとに届けよう。



「釈尊絵伝」左3図の一部
王女ムクターラターの帰依

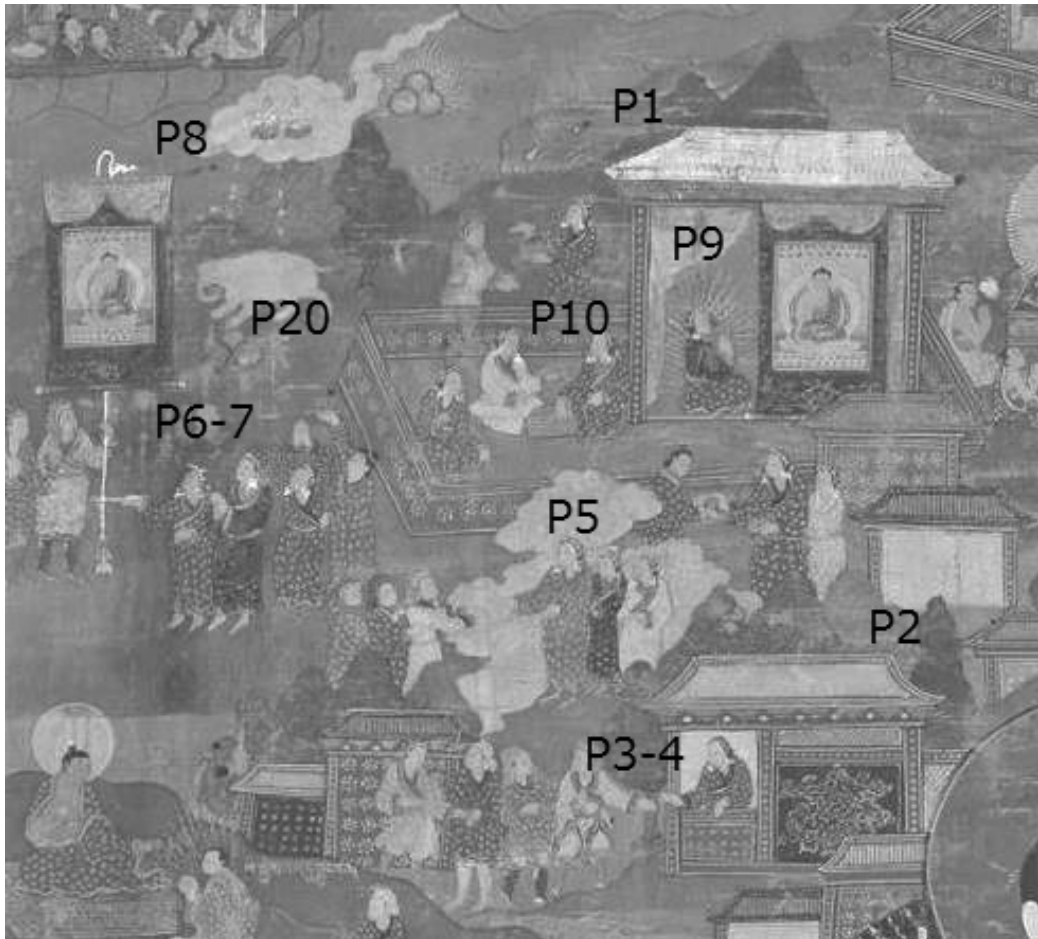
この筋書きから、この物語が三つの場所から成っていることが判る。すなわち、王女が居る（島内の）「シンハラ（Singhala）」と、商人たちが船で行き交う「海（Ocean）」、そして、ブッダが居る（インド亜大陸内の）「寺院（Buddha's temple）」である。しかし、『作画録』（RP）にこれら三所をどう描くか記載されているにもかかわらず、「釈尊絵伝」には、「寺院（Buddha's temple）」に該当する部分が存在しない。この理由については、既に奥山によって指摘がなされていた。奥山は「王女ムクターラターの物語」は「釈尊絵伝」左3図から左4図にかけて描かれており、そのため、現在は失われた左4図に、「寺院（Buddha's temple）」に該当する部分が描かれていたはずと推測した⁶⁾。幸いなことに、Quintman-Schaeffer 論文は、当該箇所（壁画）の全体写真とともに、場面ごとの拡大写真を掲載しており、この物語についての『作画録』（RP）との一致点についても図示してくれている。彼らの論文によって、「釈尊絵伝」における失われた左4図に含まれていた図案がおおよそ判明することになる。

Quintman-Schaeffer 論文は、「王女ムクターラターの物語」を分析する際、『作画録』に記載されている作画についての指示に、番号（P1からP21まで）を付し、その順序と壁画の内容がどのような関係にあるのかを検討し、最終的に一覧表にまとめている。以下は、Quintman-Schaeffer 論文において掲載されていた一覧表に、筆者が「釈尊絵伝」との対照結果を加えたものである。

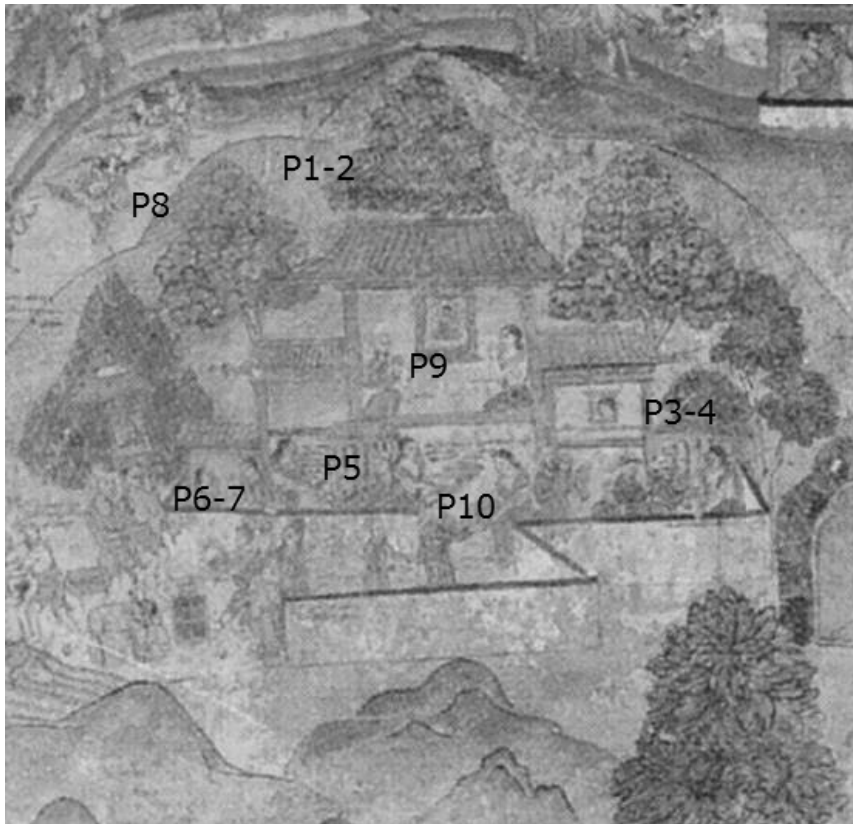
※表における○記号は、『作画録』の作画指示と一致する箇所が見出せることを示す。また、△記号は、作画指示と部分的に一致する箇所の存在を示す。

※写真の使用に関して許可を与えて下さった、Quintman と Schaeffer 両博士、並びに、花巻市博物館に深く感謝いたします。

場所	釈尊絵伝	壁画	物語の順序	『作画録』の指示 ※引用元：Quintman-Schaeffer 論文 [pp. 48-59]
(1) Singhala	○	○	①	P 1：一方に、大きな海岸線を境界とする彼方の島を描くこと。
	○	○	②	P 2：島の一部に、葉を付けた植物を伴った、住居と宮殿と家屋を描くこと。
	○	○	③	P 3：その宮殿の窓から、若い女性が聞いている。都市の端には、多くの商人が居て、彼らの端に居る商人の幾人かが〔詩節を〕詠じている。〈fig. 4, 5〉
	○	○	④	P 4：その前面に、高貴な女性と彼女の随行がその商人たちに話しかけるのを描くこと。〈fig. 4, 5〉
	○	○	⑤	P 5：もう一方の場所に、その人物（女性）が手紙を贈り物とともにその人物（商人たち）に委ねているのを描くこと。〈fig. 6, 7〉
	○	○	⑬	P 6：その島の表面と干渉せぬよう、ブッダの絵画を明かし掲げる多くの商人を描くこと。〈fig. 8, 9〉
	○	○	⑭	P 7：その女性と王と大衆が供養する。〈fig. 8, 10〉
	○	○	⑮	P 8：その中空では、神々が供養し、花々が雨のように降る。〈fig. 8, 11〉
	○	○	⑯	P 9：邸宅の中では、絵画の前で背筋を伸ばして合掌する人物。光がその人物から放たれる。〈fig. 12, 13〉
(2) Ocean	○	○	⑰	P10：その前面において、その女性と彼女の随行者が、多くの真珠を器に積み入れて、商人へ渡す。〈fig. 14, 15〉
	○	○	⑱	P11：海上の彼らの船について、商人たちの二つの〔場面〕を描くこと。此方〔ブッダの居る方〕へ来る場面と、彼方〔島〕へ進む場面を。〈fig. 16, 17〉
(3) Buddha's Temple		○	⑦	P12：平野・山・森などを伴う地域における此方側の岸では、僧院の中で、商人たちが手紙をブッダへ渡している。〈fig. 18〉
		○	⑧	P13：別の寺院の前で、ブッダの面前で、絵師が、張られた画布にブッダの肖像を描こうとしている。〈fig. 18, 19〉
		○	⑨	P14：別の場所に、ブッダの身体から発した光線が、画布の表面に達し、ブッダの身体の輪郭を明示する。〈fig. 18, 19〉
		○	⑩	P15：〔絵師たちが〕色を塗る。〈fig. 18, 20〉
		○	⑪	P16：その絵像の上下に、文字が描き込まれる。〈fig. 18, 20〉
		○	⑫	P17：その絵像を器に入れ、ブッダはそれを商人たちに委ねる。〈fig. 18, 21〉
		○	⑳	P18：別の場所で、ブッダが比丘と僧院の中に居て、商人たちがブッダに手紙と小箱を渡す。〈fig. 18, 22〉
		○	㉑	P19：その小箱が開けられ、真珠の数々が三分される。〈fig. 18, 22〉
	△	△		P20：その地域の背景に、海には真珠を有する牡蠣があり、平野には種々の宝石があり、象がひしめく森がある ⁷⁾ 。
				P21：高貴な女性たちだけが住宅内に居る。



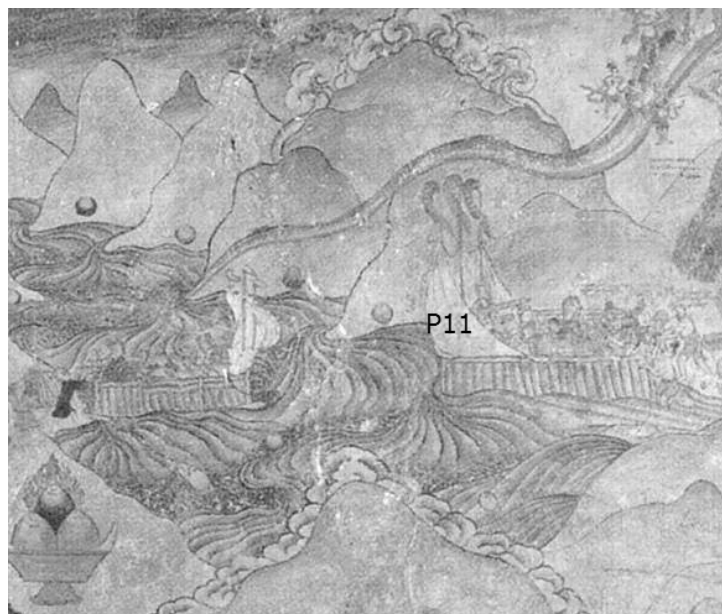
「釈尊絵伝」(1) Singhala



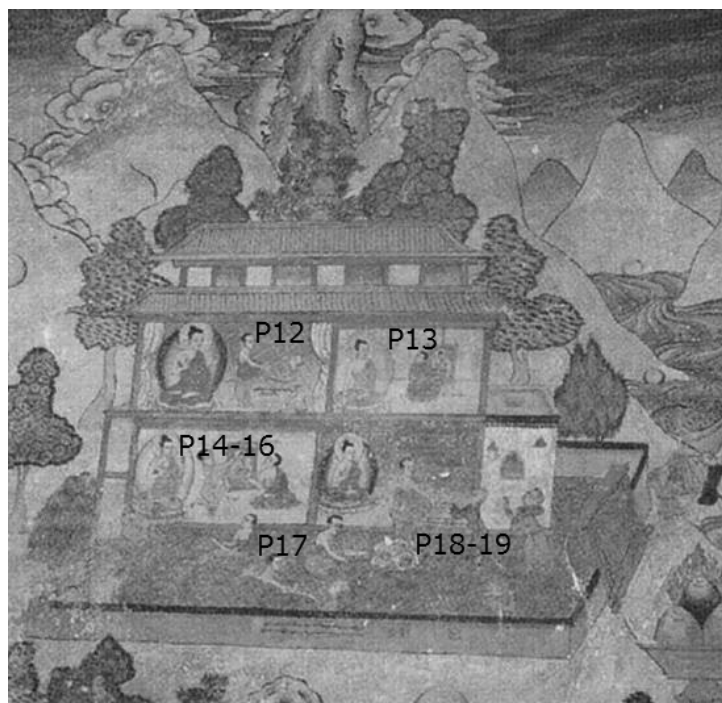
壁画（１）Singhala (Quintman and Schaeffer [2015: 48])



「釈尊絵伝」（２）Ocean



壁画（2）Ocean (Quintman and Schaeffer [2015: 47])



壁画（3）Buddha's Temple (Quintman and Schaeffer [2015: 47])

※「釈尊絵伝」はこの箇所を欠く



〈fig. 4〉「釈尊絵伝」左3図の一部



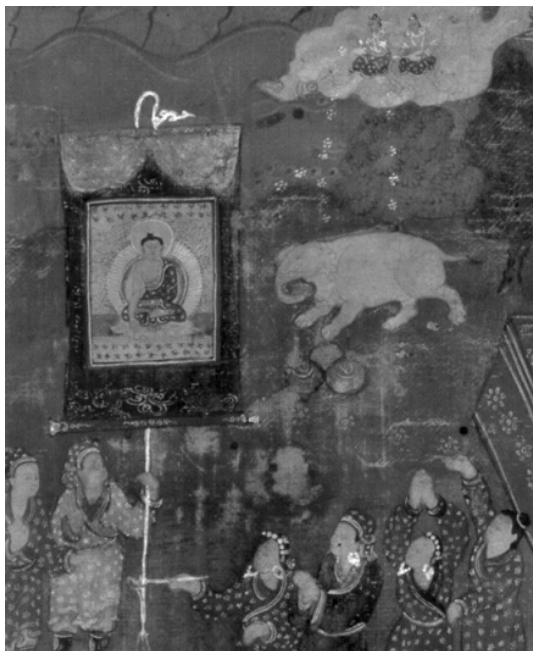
〈fig. 5〉壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 49])



〈fig. 6〉「釈尊絵伝」左3図の一部



〈fig. 7〉壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 50])



〈fig. 8〉「釈尊絵伝」左3図の一部



〈fig. 9〉壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 54])



〈fig. 10〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 55])



〈fig. 11〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 55])



〈fig. 12〉「釈尊絵伝」左3図の一部



〈fig. 13〉壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 56])



〈fig. 14〉「釈尊絵伝」左3図の一部



〈fig. 15〉壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 57])



〈fig. 16〉「釈尊絵伝」左3図の一部



〈fig. 17〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 50])



〈fig. 18〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 51])



〈fig. 19〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 52])



〈fig. 20〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 52])



〈fig. 21〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 53])



〈fig. 22〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 58])

上の表からも判ることであるが、既に奥山、及び Quintman と Schaeffer も指摘する通り、『作画録』は、物語の筋書きに沿った順序を採用せず、絵を描く際の区画ごとにまとめて、作画指示を行うことが知られる⁸⁾。Quintman と Schaeffer は、壁画と『作画録』の比較により、下の図のように、物語の時間軸に沿って（１）シンハラ（Singhala）、（２）海（Ocean）として（３）寺院（Buddha's Temple）と番号を付し、さらに、『作画録』の指示順序を〔 〕の中の数字で示す（〈fig. 23〉）。すなわち、次の〈fig. 23〉の通り、Quintman-Schaeffer 論文は、壁画の右に描かれる（１）シンハラ（Singhala）の諸場面に該当する『作画録』の指示が P1-10（指示の詳細は表を参照）だとするものであり、次に、同論文は、壁画の中央における（２）海（Ocean）の諸場面に該当する『作画録』の指示が P11 だとする。最後に、壁画の左側に描かれる（３）寺院（Buddha's Temple）の諸場面に該当する『作画録』の指示は、P12-21 だとする。



〈fig. 23〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 47])

これらを、簡潔な図に書き換えると以下になる。

壁画：（３）寺院（Buddha's Temple）[P12-21] —— （２）海（Ocean）[P11] —— （１）シンハラ（Singhala）[P1-10]

しかし、これは壁画と『作画録』の比較によって得られた結果であり、「釈尊絵伝」を加えて比較検討すると、この図には訂正すべき点があることが判る。

まず、Quintman-Schaeffer 論文では P20 と P21 は（１）シンハラ（Singhala）に割り当てられるが、ここには訂正の余地がある。というのも、P21（「高貴な女性たちだけが住宅内に居る」）については、壁画と「釈尊絵伝」のいずれにも明確な該当箇所が見出せないからである。それ故、P21 については「不明」とするのが適当であろう。次に、P20（「その地域の背景に、海には真珠を有する牡蠣があり、平野には種々の宝石があり、象がひしめく森がある」）については、（１）シンハラ（Singhala）と（３）寺院（Buddha's Temple）の両方に属させるのが適当ように見える。というのも、P20 の後半（「平野には種々の宝石があり、象がひしめく森がある」）の内、

壁画では、「宝石」について（１）と（３）との両方に見出される（〈fig. 24〉）。また、「釈尊絵伝」でも、「宝石」は王女ムクターラターの周辺（つまり（１））に見出され、また、壁画に描かれていない「象がひしめく森」についても、「釈尊絵伝」では（１）に描かれている（〈fig. 25〉）。もちろん、P20の前半（「海には真珠を有する牡蠣があり…」）については、壁画にも「釈尊絵伝」にも明確な該当箇所は見当たらず、問題は残されたままである。ただし、壁画の（２）の水中には「巻き貝らしきもの」（〈fig. 26〉）が描かれており、「真珠を有する牡蠣」（mu tig 'dzin pa'i nya phis）を象徴的に表現した可能性も捨てきれない。



〈fig. 24〉 壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 47])



〈fig. 25〉「積尊絵伝」左3図の一部



〈fig. 26〉壁画 (Quintman and Schaeffer [2015: 59])

以上見てきたように、P20は（1）シンハラ（Singhala）と（3）寺院（Buddha's Temple）にも該当し、P21の該当場所は「不明」とするのが妥当である。それ故、Quintman-Schaeffer 論文における図は、次のように訂正することが可能と考える。

壁画：（３）寺院（Buddha's Temple）[P12-20] ----- （２）海（Ocean）[P11, 20 (?)] ---- （１）
シンハラ（Singhala）[P1-10, 20]

* P21 該当箇所不明

さらに、「釈尊絵伝」について、壁画との比較対照を通して、もう一つ指摘できることがある。それは、「釈尊絵伝」の失われた箇所（左４図）についてである。既に一覧表において見たとおり、壁画と「釈尊絵伝」は共に、『作画録』の指示にはほぼ忠実であることが判っている。従って、「王女ムクターラターの物語」も、その一部が、「釈尊絵伝」の失われた左４図に含まれていたことはほぼ確実である。さらに、今回、壁画と比較することで、その左４図に含まれていたはずの失われた箇所がどのようなものだったか、以下の通り、ほぼ判明するのである。

釈尊絵伝：（３）--欠落-- （２）海（Ocean）[P11] ---- （１）シンハラ（Singhala）[P1-10, 20]

* P21 該当箇所不明

この図から、「釈尊絵伝」に現存する箇所は、壁画にも同様に各々ほぼ独立して描かれる（２）と（１）に対応することが判る。そして、「釈尊絵伝」における失われた左４図には、Quintman-Schaeffer 論文が（３）寺院（Buddha's Temple）と呼ぶ、「インド亜大陸における出来事を描いたエリア」が含まれていたであろうことが判明するのである。Quintman と Schaeffer の論文に基づいて行われた、壁画と「釈尊絵伝」に関する今回の比較作業によって、「釈尊絵伝」において「かつて存在し、現在は失われた箇所がある」という主張が補強されただけでなく、そこに如何なる図像が見出されるはずなのか、という点について従来よりも具体的な推測が可能となった。

謝辞

研究の遂行上必須となる資料のご提供、ならびに使用について快諾下さった花巻市博物館、Andrew Quintman 教授、Kurtis R. Schaeffer 教授に、甚深の謝意を表します。また、執筆にあたり様々なご助言ご指導を下さった皆様に感謝申し上げます。

略号

SD（＝『御行の略説』）“Bcom ldan 'das thub pa'i dbang po'i mdzad pa mdo tsam brjod pa mthong bas don ldan rab tu dga' ba dang bcas pas dad pa'i nyin byed phyogs brgyar 'char ba zhes bya ba,” in *The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranātha (Reproduced from a set of prints from the Rtag-brtan Phun-tshogs-gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladak)*, volume 12, published by Namgyal and Tsewang Taru, Leh: Ladakh, 1985.

RP (=『作画録』) “Ston pa Śākya'i dbang po'i mdzad pa brgya pa'i bris yig,” in *The Collected works of jo-nang rje btsun Tāranātha* (Reproduced from a set of prints from the Rtag-brtan Phun-tshogs-gling blocks preserved in the library of the Stog Palace in Ladakh), volume 12, published by Namgyal and Tsewang Taru, Leh: Ladakh, 1985.

参考文献

Quintman, Andrew and Schaeffer, Kurtis R.

2015 “The Life of the Buddha at Rtag brtan Phun tshogs gling Monastery in Text, Image, and Institution: A Preliminary Overview,” *Journal of Tibetology* (『藏学学刊』), vol. 13, 32-73.

奥山直司

1991 「多田等観請来仏伝図タンカについて」『密教図像』10, pp: 27-42.

1996 「多田等観請来「釈尊絵伝」について」『釈尊絵伝』[解説]、東京：学習研究社。

蔵脩館 編

1973 『多田等観請来西藏仏像、仏画図録』花巻：蔵脩館。

註

1) 奥山 [1991 : 28].

2) 奥山 [1996 : 62-87].

3) 蔵脩館 [1973].

4) 奥山 [1996 : 65].

5) Quintman and Schaeffer [2015: 34, 69].

6) 奥山 [1996 : 67-8].

7) yul ljongs phar phyogs gling der / chu dang thang la mu tig 'dzin pa'i nya phyis dang / rin po che du ma dang / nags tshal la glang po ches khyab pa / [RP: 100b5-6]

8) 奥山 [1996: 77], Quintman and Schaeffer [2015: 46].